

授業科目名	生と死の倫理学 ——医学的人間学入門	担当教員	丸橋 裕
必修の区分	選択		
単位数	2単位		
授業の方法	講義		
開講年次	2年次第3クォーター		
講義内容	<p>本講義の目的は、生まれ、老い、病み、死にゆく生命、自然的・社会的関係の中でより善く生きようとする生命の充実を問題にし、「病む人」の現象学的な現実可能なかぎり寄り沿いながら、そのような全一的生命の本質を問い直すことにあります。そのために、まず、西洋古代から現代にいたる生命に関する哲学的な思惟の歴史を概観したうえで、「生命倫理」という特異な知のあり方の誕生と現実を見定めます。つぎに、私たちの日常生活やとりわけ医療の現場に生じてくる「誕生」と「死」をめぐる諸問題について、具体的な症例や芸術作品に即して考察します。そして最後に、ヴィクトア・フォン・ヴァイツゼカーの医学的人間学の基本思想に学ぶことによって、つねに窮境に直面して生きている私たち人間が、「生の相互性」と「死の連帯性」をいかに現実化していくべきなのかを、パトスの知に根拠づけられたケアの倫理に即して追究します。</p>		
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 医学的人間学の基本的な考え方を理解し、説明することができる。 2. 私たちの日常生活や医療の現場に生じてくる生命倫理の諸問題について考え、対話・討論することができる。 3. 全一的な生命に関する諸問題について自らの専門領域の観点から対話・考察し、実践に結びつけることができる。 4. 自分自身が最も関心を寄せる「生と死」の問題について、医学的人間学の観点をふまえて自ら考察し、最終レポートにまとめることができる。 		
授業計画	<p>序 「病む人」の抑圧と現代</p> <p>I 医学的人間学への道</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 死という謎——「病い」への向かい方 2 生命観と医療の歴史——生命の尊厳とは何か 3 生命倫理の誕生と現実——原則論から物語論、そしてケアの倫理へ <p>II 誕生をめぐる謎</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 出生前検査と人工妊娠中絶——内なる優生主義は克服できるか 2 生殖補助技術と代理母——『夏物語』と『燕は戻ってこない』が問いかけること 3 赤ちゃんポストと内密出産——「反出生主義」にどう応えるか <p>III 死をめぐる謎</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 脳死と臓器移植——あなたはドナーカードに署名しましたか 2 安楽死と尊厳死——「人生会議」とターミナル・ケア、「自殺ツーリズム」を考える 3 「生きるに値しないひと」は存在するか <p>IV 医学的人間学の可能性</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 原場面——窮境と癒し 2 医学的人間学とは何か——ゲシュタルトクライスと来たるべき人間学的なパトスの学 3 人間学的医療への道——パトスの知とケアの倫理 		

事前・事後 学習	事前には、あらかじめ提示された資料を熟読して、そこに発見できる問題について熟考しておく。また事後には、講義や対話・討論を通じてえられた示唆にもとづいて、自らの問題についてさらに考察を深め、自らの考えをまとめる。
テキスト	塩野寛／清水恵子著『生命倫理への招待』改訂6版（南山堂）
参考文献	ヴィクトーア・フォン・ヴァイツゼカー著、木村敏／丸橋裕監訳『自然と精神／出会いと決断』（法政大学出版局）
成績評価 の基準	対話討論（15%）、ミニレポート（25%）、中間レポートないしプレゼンテーション（20%）、期末試験ないし最終レポート（40%）などによって総合評価します。
履修上の注意 履修要件	グループによる対話討論やプレゼンテーションを積極的に導入します。プレゼンテーションのグループ分けを第2講目に行いますので、履修希望者は可能なかぎり出席してください。定員を超過した場合は、第2講までの出席者を優先します。
備考欄	第Ⅱ部、第Ⅲ部の各章は担当グループによるプレゼンテーションが中心となります。各グループは一週間前までに発表原稿を作成し、オフィスアワーに教員と事前の打ち合わせを行う必要があります。